

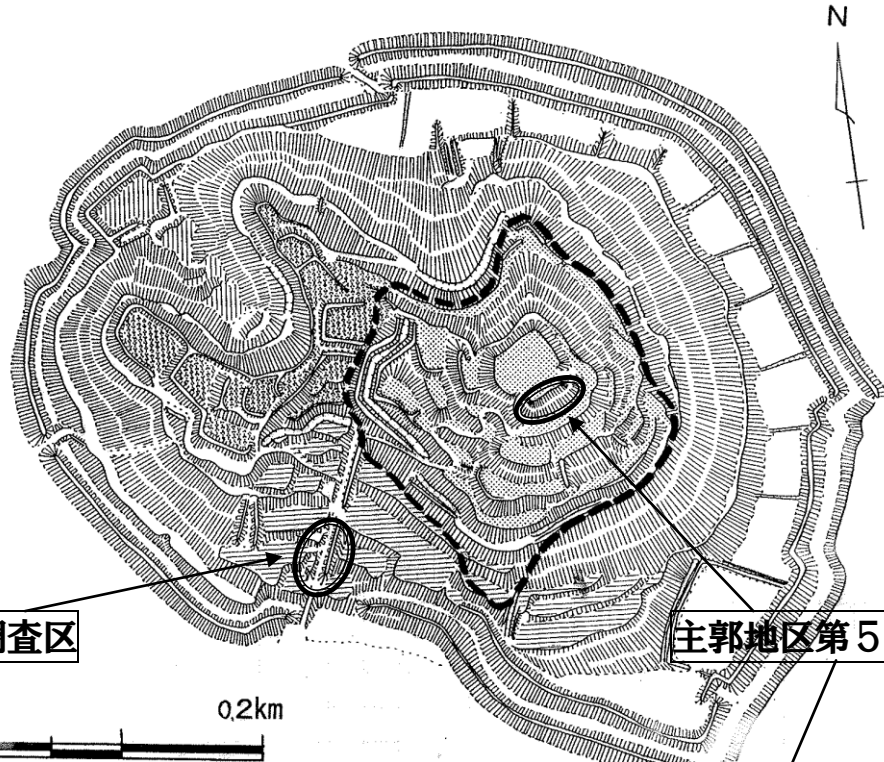
# 史跡小牧山

## 主郭地区第5次発掘調査・本庁舎跡地発掘調査

### 現地説明会 資料

平成24年12月1日(土)

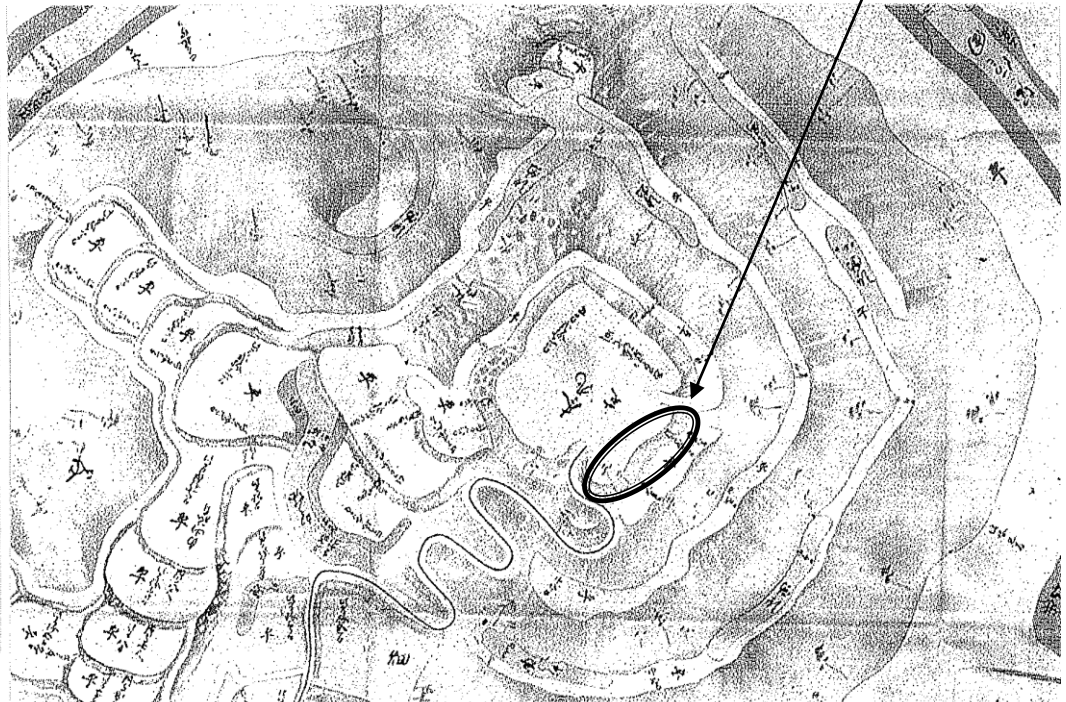
小牧山城縄張図  
(破線の範囲が主郭地区)



本庁舎跡地調査区

主郭地区第5次調査区

春日井郡小牧村古城絵図(部分拡大)  
※十七世紀中頃  
蓬左文庫蔵



遺 跡 名	こまきやまじょう 小牧山城 (国指定史跡 小牧山)
所 在 地	愛知県小牧市堀の内一丁目地内
調 査 理 由	史跡整備
調 査 面 積	約580㎡ (予定)
調 査 期 間	平成24年7月～平成25年3月 (予定)
調 査 主 体	小牧市教育委員会

## 1 調査の概要 (何がでてきたのか)

史跡小牧山主郭地区の発掘調査は史跡整備に伴う事前調査のため、4カ年の試掘調査と4カ年の発掘調査を経て、今年度が9年目となります。また今年度は、南麓の大手道周辺で旧本庁舎の跡地の整備に先立つ事前調査も併せて実施しました。今回の調査と過去の調査成果から、永禄6年(1563)に織田信長が築いた小牧山城の姿が徐々に明らかとなってきました。

今年度の調査で得られた主な成果は以下のとおりです。

### 1. 主郭地区第5次発掘調査 (P5 概要図)

主郭(本丸)南東斜面、大手道の東側を中心に調査中です。

主郭を囲むようにめぐる上下2段の石垣の2段目を確認しました。石垣が屈曲するコーナー部(隅角部)の状況がはじめて明らかとなり、最も古い段階の石垣の構築技法を知る手がかりとなりました。

また、一部では石垣に代えて、山本来の岩盤を垂直・水平に加工して併用していることも判明しました。



### 2. 本庁舎跡地発掘調査 (P6 概要図)

麓から直線的に延びる大手道の両側で調査を実施しました(調査は終了しています)。現位置は留めていないものの、大手道と土塁を画すために配置されたと思われる石が残っており、これによりこれまで4mとみなされていた大手道の幅が5.4mに広がる可能性が高まりました。また、曲輪の斜面(切岸)を高さ3mに及ぶ造成工事により成形していることも確認され、その切岸工事には「土嚢工法」が採用されていたことを示す痕跡が見つかりました。

※ 土嚢積みの痕跡については本日は見学できません。



## 2 まとめ（何が明らかになったのか）

### 1 主郭をめぐる斜面の石垣(下段)で隅角石を確認しました。

今年度の主郭地区の調査では上下段石垣を確認しておりますが、そのうち、下段石垣の出隅（屈曲部）には石垣の隅角石が残っており、初めて隅角部の構造を確認することができました。石垣の隅角は構築技術が劇的に進化する箇所、時代様相をもっとも反映する場所の1つです。今回確認した角では、後に一般的に採用される「算木積（さんぎづみ）」をしていないことが判明しました。つまり、まだ算木積という技術を会得していない集団の手によるものということになり、小牧山城の石垣の築造年代を検証する上で重要な手がかりとなります。

### 2 主郭大手道脇に「石の壁」が見つかりました。

主郭をめぐる石垣は一部では岩盤を切りたてたものを併用する箇所があることはこれまでの調査からも推定されていましたが、その状況が顕著にわかる部分が出てきました。また、大手道付近では、その岩盤の切りたてが、まるで研いだように平滑に仕上げられた部分が見つかりました。まるで、フロイスが岐阜城で形容した「石の壁」（注1）そのものようです。

### 3 大手道の幅を確認しました。

小牧山城の南麓から直線的に延びる大手道は、これまでも信長が天正4年から建設に着手した安土城の大手道との類似性が指摘されてきました。現認できる大手道の幅は約4mですが、今回の調査により築城時には5.4mの幅であったことが推定できるようになりました。

### 4 切岸(城の斜面)に「土嚢積み工法」が用いられていることが判明しました。

切岸とは、字のごとく山肌を急峻に削りだして防御性を高めた城の斜面のことです。そのため、多くの城では、切岸部分を調査すると山の地肌がすぐに出てきます。しかし、今回の調査では、切岸部分を3mも盛土で造成し、その表面に土嚢が積まれている状況が明らかとなりました。このことは、急峻な斜面を盛土で保持することが困難であり、当時の築城技術者が土嚢を用いることでその勾配を実現させようとした、小牧山城築城工事の生々しい状況を物語っています。しかし、この工事に関しては、状況証拠的には信長時代の工事である可能性が高いものの、家康の改修によるものという可能性も残っています。

#### 【「算木積」とは】

城の石垣の隅部の構築技法のひとつで、慶長10年（1605）以降に完成する技術です。算木はそろばんが伝来する以前に計算に使われた棒のことで、隅石の形が算木に似た長方形の棒状であることから命名されました。隅石の長辺と短辺を一段ごとに互い違い組み合わせることで石垣の隅部を補強し、崩れにくく高い石垣の構築が可能となりました。



算木積の石垣隅角部（香川県・高松城）

付表1：小牧山の歴史

時代	年	できごと
戦国時代	永禄 6年 (1563)	織田信長が小牧山城を築城し、清須から移る。小牧山南麓には城下町を整備した。
	10年 (1567)	織田信長、稲葉山城を攻略。岐阜と改称し、小牧山から居城を移す。小牧山城は廃城となる。
安土桃山時代	天正12年 (1584)	小牧・長久手の合戦 (羽柴秀吉軍と織田信雄・徳川家康連合軍の戦い) 徳川家康は織田信長の小牧山城跡を改修して陣城を築く。
江戸時代	慶長15年 (1608)	名古屋城築城開始。小牧山城の石垣を持ち出しか？
		小牧山は尾張藩領となり、家康公ゆかりの地として、一般の入山が禁止される。
明治時代	明治 2年 (1869)	版籍奉還により、小牧山は国有地となる。
	5年 (1872)	県立小牧公園として一般公開される。
	22年 (1889)	小牧山が徳川家の所有となり、一般公開を止める。
昭和～平成	昭和 2年 (1927)	10月26日 国の史跡に指定される。
	5年 (1930)	徳川家から小牧町へ小牧山が寄付される。
	22年 (1947)	東麓に小牧中学校が建設される。
	43年 (1968)	山頂に小牧市歴史館が建設される。
	平成10年 (1998)	小牧中学校を史跡外へ移転する。
	15年 (2003)	小牧中学校跡地を史跡公園として整備、開放される。
	16年 (2004)	主郭地区試掘調査開始 (第1～4次調査)
20年 (2008)	主郭地区発掘調査開始 (第1～4次調査)	

付表2：織田信長天下統一への過程と城郭

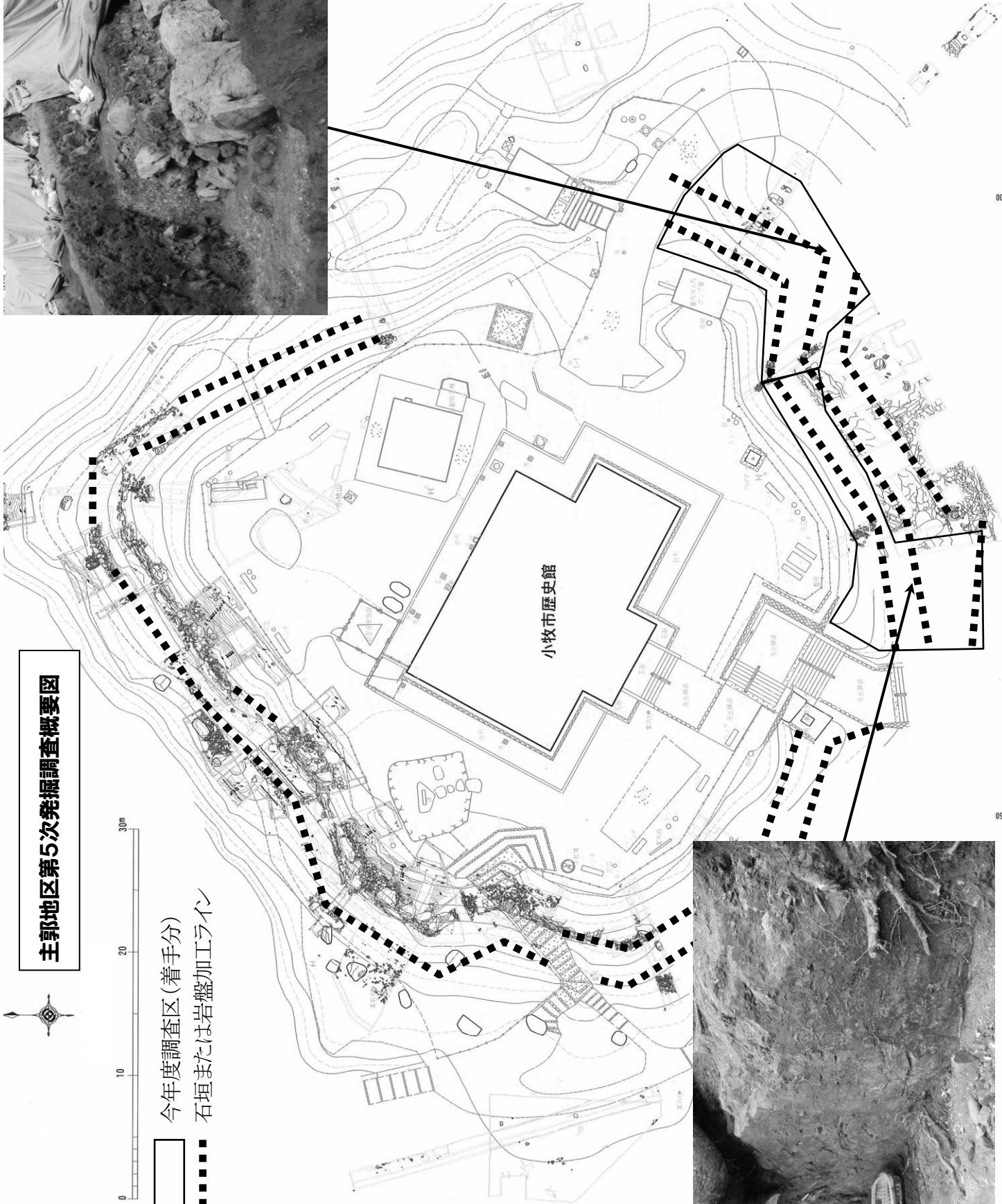
年代	信長年齢	できごと	城郭名	信長築城か？
弘治 元年 (1555)	22 歳	清須城入城	清須城 : 石垣なし	×
永禄 3年 (1560)	27 歳	桶狭間の戦いで今川義元を討つ		
永禄 6年 (1563)	30 歳	小牧山城築城、清須から移る	小牧山城 : 石垣構築	○
永禄10年 (1567)	34 歳	稲葉山城攻略、岐阜城と改め 小牧山城から移る	岐阜城 (千畳敷) : 巨石石積	改修
天正 4年 (1576)	43 歳	安土城築城開始	安土城 : 総石垣	○
天正10年 (1582)	49 歳	本能寺の変		

## ※注1

「宮殿は非常に高いある山の麓にあり、その山頂に彼の主城があります。驚くべき大きさの**裁断されない石の壁**がそれを取り囲んでいます。第一の内庭には、劇とか公の祝祭を催すための素晴らしい材木でできた劇場ふうの建物があり、その両側には、二本の大きい影を投ずる果樹があります。広い石段を登りますと、ゴアのサバヨのそれより大きい広間に入りますが、前廊と歩廊がついていて、そこから市の一部が望めます。」


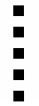
松田毅一・川崎桃太訳

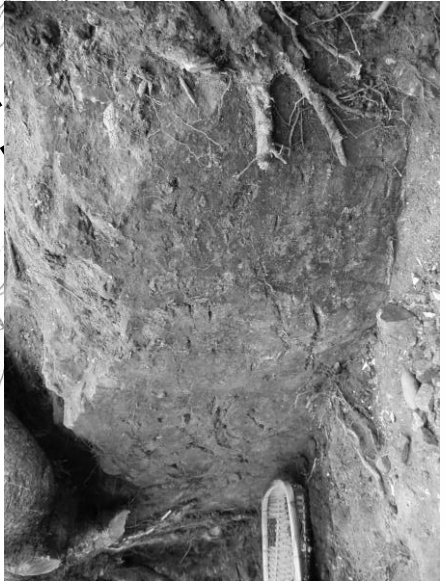
「完訳フロイス 日本史2 織田信長篇2」中公文庫2000 より引用



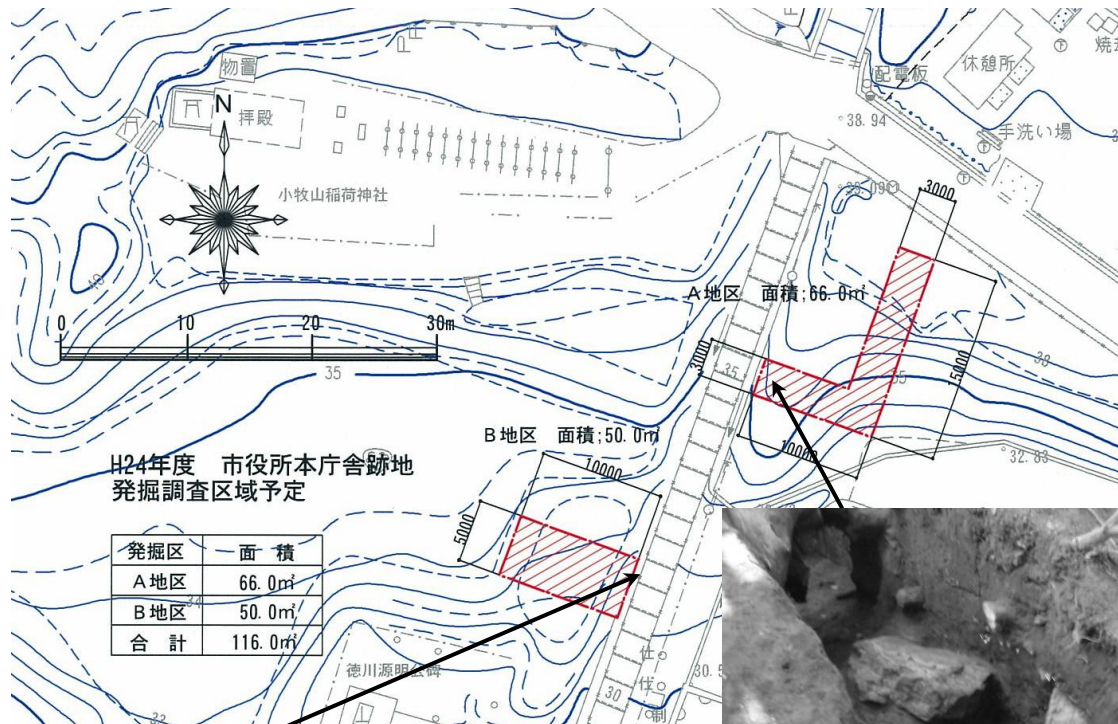
主郭地区第5次発掘調査概要図



- 
 今年度調査区(着手分)
- 
 石垣または岩盤加工ライン



## 本庁舎跡地発掘調査概要図



② 大手道西側 土塁



① 大手道東側 石積みの痕跡



### 小牧山城築城450年

平成25年(2013)は、織田信長が永禄6年(1563)に小牧山城を築城し、清須から居城を移してから450年という節目の年にあたります。小牧市では、『夢・チャレンジ 始まりの地小牧』と称して1月から1年間さまざまな記念行事に取り組む予定です。

今回の発掘調査の成果が、皆さんが450年前の小牧山の姿に思いを馳せていただくきっかけの一助になることを願っています。

